

神道系保育所・幼稚園等における保育・教育理念の特色

— 全国神社保育団体連合会の九州ブロックにおける加盟園を事例として —

安部 高太郎¹⁾ 吉田 直哉²⁾ 鈴木 康弘³⁾

¹⁾ 郡山女子大学短期大学部

²⁾ 大阪府立大学

³⁾ 八戸学院大学短期大学部

How Do Shintoist Ideals of Early Childhood Education and Care (ECEC) Feature in Nursery Schools and Kindergartens in Kyushu Area?

ABE Kotaro¹⁾ YOSHIDA Naoya²⁾ SUZUKI Yasuhiro³⁾

¹⁾ Koriyama Women's College

²⁾ Osaka Prefecture University

³⁾ Hachinohe Gakuin Junior College

Abstract : The purpose of this paper is to clarify the features of Shintoist ideals of early childhood education and care (ECEC) in nursery schools and kindergartens in the Kyushu area. We will analyze these features by focusing on Shintoist words, phrases, and events or activities (with up to 22 cases) in ECEC.

From KH coder analysis, it is clear that the cultivation of aesthetic sensitivity in Shintoism is key. The energy of a child's pure spirit is described as "*Kiyoku-Tadashiku-Akarui*." "*Kiyoku*" means that a child's spirit is as pure as the gods'. "*Tadashiku*" means that children should behave honestly. "*Akarui*" means that the energy of a child's pure spirit should appear smiling and communicate with people honestly. The grove of the village shrine is an important environment of ECEC in Shintoist nursery schools and kindergartens. Children are cultivated in its nature.

In short, the grove of the village shrine is an important feature of Shintoist ideals of ECEC in nursery schools and kindergartens in the Kyushu area.

Key Words : Shintoism, Ideals of ECEC, Cultivation of aesthetic sensitivity, The energy of Child's pure spirit, Grove of the village shrine

抄録 : 本稿の目的は、九州地方に所在する全国神社保育団体連合会加盟園の保育・教育理念の特色を明らかにするものである。神道に関連する文言を理念に掲げ、神道行事等を行っている22園分の理念をテキストファイル化し、KH コーダーを用いて保育・教育理念の特徴を析出した。

神道系園の保育・教育理念では、目指されるべき子ども像として「浄く・正しく・明るい」子どもが掲げられる。「浄く」とは、精神の明澄さを表す。「正しく」とは、実直なさまを表す。「明るい」とは、精神的なエネルギーが充溢した自己の内面を開示して、他者と交流するさまを示す。保育環境として重視されている、神社と一体化した鎮守の森は、神の顕現としての自然の豊かさを満えることで子どもの心を揺さぶる。自然としての神の脅威に触れ、その恵みに感謝することが、神道園における情操教育の基盤なのである。自然に宿る神は、保護者と共に子どもの成長を見守る水平的・共存的存在である。

キーワード : 神道、保育理念・教育理念、情操教育、「浄く・正しく・明るい」子ども、鎮守の森

1 はじめに

本稿は、神道系保育所・幼稚園等（以下、神道系園、とする）における保育・教育理念の特色を明らかにするものである。

本研究の分析対象は、全国神社保育団体連合会（以下、神保連、とする）の九州ブロックの加盟園のウェブサイトである。神保連のウェブサイトを見ると、2019年2月現在、全国で196園が神保連に加盟している。このうちの約四分の一にあたる52園は九州地方に集中している。本稿では、九州地方の神保連加盟園52園のウェブ上で公開されている保育・教育理念をテキストファイル化した。これら52園のうち、8園は園のウェブサイトを有していなかった。加えて、「生き生きと活動する幼児の育成」（門川幼稚園）や「どの子にも明るい未来と幸せを」（小木保育園）のように、「神道」あるいは「神社」などの神道に関わる文言が全く見当たらず、かつ、年間行事等を見ても例大祭参加などの神道系の行事も見当たらない園が22園あった。これら30園については、本稿の趣旨である、神道系園における保育・教育理念の特色を見るうえでは不適切であると判断し、除外した。本研究は、上記の30園を除外した22園分の保育・教育理念に関するウェブ上の記述をテキストファイル化したものを分析対象とした。分析手法はテキストマイニングソフト KH コーダーを用いた計量テキスト分析である。

全国の幼稚園数は2017年時点で10,878園（文部科学省 2018）、保育所数は2015年時点で24,234園（厚生労働省 2018）、認定こども園数は2017年時点で6,160園（内閣府 2018）という現状に照らせば、神保連加盟園数は少数と考えられるかもしれない。日本カトリック幼児教育連盟加盟園数が513園、キリスト教保育連盟加盟園数が約800園に比較しても神保連加盟園は少数派と言える。園数の僅少さを反映してか、神道保育に関する先行研究は非常に少ない。神保連が出した『神社保育要領』（1965年）と、それを改訂した『神社保育ハンドブック』（1981年）を比較検討した論考（矢口 1998）があるが、実際にどのような保育・教育理念に基づいて神道系園において保育・教育がなされているのかを検討したものではない。佐藤達全は、仏教保育における保育者の信仰の問題を考察した論考（佐藤 2006）のなか

で、神道保育との比較を試みている。佐藤は、2001年に神保連の新ハンドブックとして出された、『鎮守の森を保育の庭に：命を育む知恵がここに』（上・下巻、2001年）の内容¹⁾を整理したうえで、神道保育に関わる保育者の神道信仰は強調されていないが、神道保育は、神様は自然のなかに宿るとした日本人の信仰や風習を背景として、神社を中心とした信仰や風習を保育活動に取り入れ、自然を大切にしながら、豊かな感性を育もうとする点に特色を見出している（佐藤 2006：136）。すなわち、これらの先行研究においては、神社保育、あるいは神道保育は、日本人の民間信仰や土着信仰と渾然一体としたメンタリティ、あるいは価値観を包含するものであり、必ずしも自らの保育の宗教性（非世俗性）を前面には出していないとされているのである

これまでの先行研究においては、神道保育の中核にあると考えられるハンドブックの内容検討がなされているものの、それぞれの神道系園が自らの保育を対外的にどう示しているのかに関しては分析がなされていない。本稿がウェブサイト上の保育・教育理念に着目したのは、この点と関連する。例えば、子どもをその園に入れるかどうか、保護者が検討する際には園のウェブサイト上で公開されている情報は、重要な判断材料とされる。すなわち、ウェブサイト上では保護者や地域住民に対して、その園の特色がわかりやすく示されているのではないかと考えられる。本稿では、神保連のハンドブック等を参照しつつ、神道系園が自らの保育・教育理念をどのような言葉を用いて語っているのかを明らかにする。

2 KH コーダーによる分析結果と考察

(1) 抽出語リストの「名詞」上位10語等を踏まえた分析

KH コーダーの「抽出語リスト」作成機能を使用すると、「名詞」に関しては次のような順で頻出している。

抽出語リストの名詞を見ると、神道系園の保育・教育理念上は、「子ども」について多く語られていることが予想される。このことは、神道系園の保育・教育理念が、「子ども」観として提示されていることを示唆している。また、「神社」という名詞も頻出しており、仏教やキリスト教を母体とする園と比べると²⁾、

表1 KHコーダーによる抽出語リストの「名詞」上位10語

順位	名詞	出現回数
1	子ども	44
2	神社	18
3	環境	13
4	気持ち	9
5	思いやり	9
6	自分	9
7	神様	8
8	社会	7
9	集団	6
10	場所	6

保育理念として、「神道」であることを園の独自性として前面に打ち出していることが読み取れる。さらに「気持ち」や「思いやり」などの心情・感情に関する名詞も頻出していることから、これらの涵養、すなわち情操教育に力を入れていることが予測される。情操教育の重点化は、仏教園、プロテスタント園など、宗教系保育施設と共通する性格であると言えよう。

全抽出語に関する「共起ネットワーク」は、次の図1である。

図1を見ると、名詞の抽出語リスト上位の語のうち、「気持ち」は「感謝」と、「思いやり」は「心」と共起している。つまり、神道系園の保育・教育理念では、子どもが、感謝の気持ち、思いやりの心を持つことが目指されていることが予測される。

次に、神道との関連性が強いと思われる「神様」に着目すると、「神様」は、「四季」・「成長」・「願う」などの語と共起していることがわかる。この共起関係が出てきた背景には、神道における「神様」は、「四季」という形で自然に宿り、現れる存在だという認識があるのだろう。逆に言えば、「神様」は、自然を四季という形で動かす存在と見なされているとも考えられる。

「成長」と「願う」の共起は、保護者観を反映している³⁾。つまり、ここでは、身近な生活環境に自然的存在として共在している神様に対し、神様が子どもを「見守って」くれることを「願う」という保護者像がうかがい知れる。さらに、能力に関する語彙としては、幼稚園教育要領などのナショナル・カリ

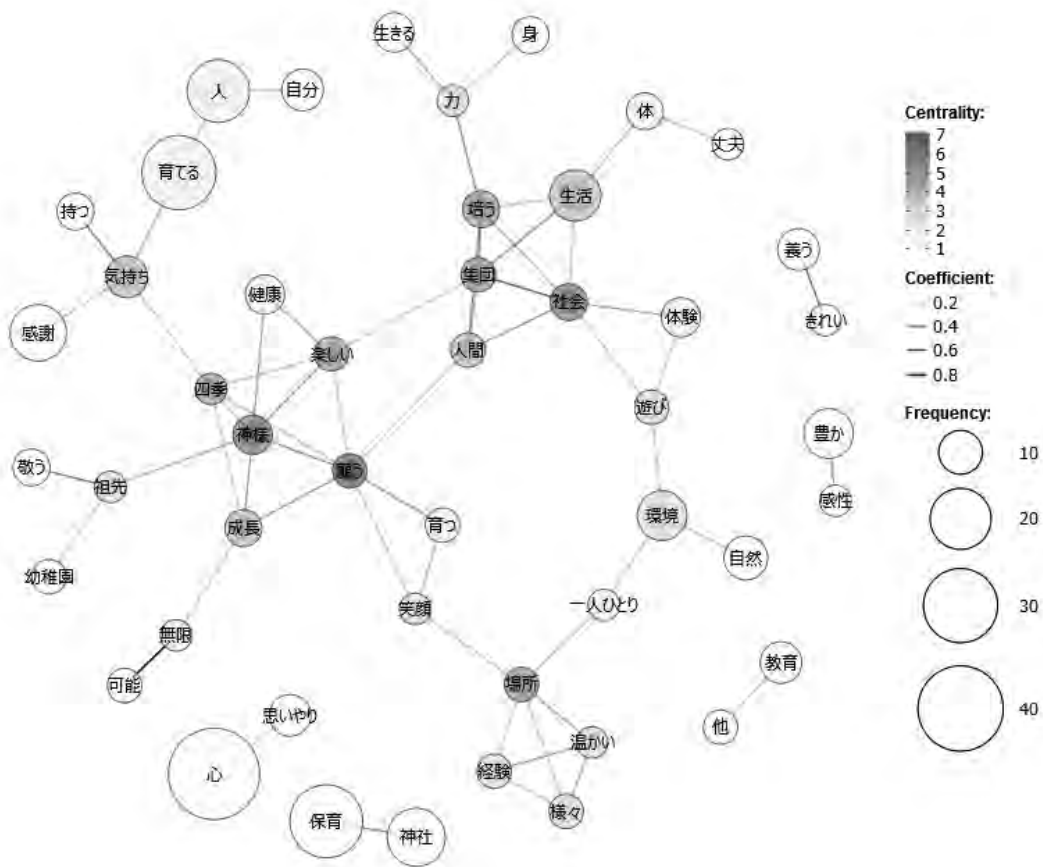


図1 神道系保育所・幼稚園の保育・教育理念の全抽出語の共起ネットワーク（次数中心性）

キュラムでも用いられている「生きる力」というフレーズが登場している。

集団生活を通じて培われることが目指される「生きる力」とは、「自然」「環境」の中で、「集団」という他者と共にある環境の中で、もしくは、「遊ぶ」ことによって育つと思われているようである。つまり、「生きる力」が、「集団」による「生活」の中で「培」われていくという能力観ないし発達観がここから読み取れる。「生きる力」は、子どもが身につけてほしい「社会」性を示しているのである。

(2) 子ども

「名詞」の第一位である「子ども」についてKHコーダーの関連語検索（単位：段落、以下同様）を行うと、共起性の高い順に「育てる」（Jaccard 係数：0.1724）、「大切」（Jaccard 係数：0.1429）、「明るい」（Jaccard 係数：0.1429）の三語が共起している。

以下では、「子ども」と共起しているこれらのフレーズを、具体的な文例とともに考察を加えていく。KWICの結果、「明る」さに関する「子ども」の用例には次のようなものがある。

昭和24年に開園した水天宮保育園は、水天宮を母体とした神社神道の基本的な精神の、**浄く・正しく・明るく・素直な子どもたち**を育成することを保育理念としています。

（水天宮保育園）

水天宮保育園の場合には、神道の基本精神を、「**浄く・正しく・明るく・素直**」なことだとしている。ここでの「**浄く**」は「**清く**」と同義であると考えられる。神道における「**清め**」は「**清浄**」^{しょうじょう}とも呼ばれるからである（神保連編 2001 [上巻]: 10, 13-14）。神道において重視されるまごころは「**明き浄き直き誠の心**」と要素に分けて示されることもあり、水天宮保育園の保育理念は、「まごころ」、すなわち夾雑物のない純粋な精神的エネルギーを充溢させた子どもを育てるということである。「**浄く**」とは、清流の水のように、よどみがなくて、透き通ったさま、明澄なさまを表す。さらに、「**正しく**」と「**素直**」は、精神状態が外部の影響を受けて歪まない、実直なさまを表す。「**明るさ**」というのは、外部の悪しき影響

力を受けない純粋な生命力が、他者に対する行動・言動として、いわば直接的、かつ直線的に表出される状態を指すものと考えられる。したがって、水天宮保育園の「**浄く・正しく・明るく・素直な子どもたち**」は、清らかな精神的エネルギーを、歪むことなく、行動・言動として外面に表出できる子どものことを表していると言える。

同様の子ども観を示している例として、聖徳保育園のものを挙げておこう。

明るい笑顔、元気な子ども。

地域と関わりながら一人一人の子どもを大切に
して信頼関係を築く。

遊びを通して、のびのび育つ環境を整え、社会
体験を重視し、人と人との関わりを大切にする。
[…中略…]

朝のお集りの中で“私たちの誓い”を日々唱和
する。

わたしたちの誓い

- 一 神様をうやまいます
- 二 郷土と国を愛します
- 三 きまりをよく守ります
- 四 他の人々を助けます
- 五 体を強くします
- 六 きれいな心を養います
- 七 物を大切にします
- 八 人に迷惑をかけません
- 九 ご恩を忘れないようにします

（聖徳保育園）

聖徳保育園においては、「明るい笑顔」の「元気」な子どもとなることが目指され、さらに毎朝唱和している“私たちの誓い”では「きれいな心を養う」となっている。ここでいう「きれいな心」とは水天宮保育園でいう「**浄い心**」と同一のものと考えられる。つまり、よどみのない、清らかな心である。純粋な内面である「きれいな心」がストレートに表出された状態が「**明るさ**」であり、それを聖徳保育園の場合には、「**笑顔**」と表現している。「きれいな心」を表出する子どもが同時に「**元気**」でもあるのは、「きれいな心」が、単に無垢・純白な内面的空虚ではなく、純粋な精神的なエネルギーが充溢したものと

して認識されていることを示唆している。そのような精神的なエネルギーが外面に溢れ出るさまが「元氣」さに他ならない。さらに、聖徳保育園では、地域の方との交流などを含む「人と人との関わり」を重視しているが、ここでいう「人と人との関わり」とは、清らかな心を持った者同士が、その内面をストレートに発揮しあう、いわば裏表の区別のないコミュニケーションがなされることであろう。

「明るさ」や「正しさ」が前面化されている保育理念の例として、以下が挙げられよう。

「明るく、正しく、仲良く」の精神に基づいて、思いやりと感謝の心を持った子どもに育つように、「心の教育」を第一の方針としています。

明るく素直で、仲良く遊べる子ども

正しい言葉で、誰とでも話し合える子ども

創造性に富み、熱心に取り組める子ども

(たけしま保育園)

たけしま保育園の場合も、上記二例と同様に、「明るさ」と「正しさ」を目指すべき子ども像の中核に据えている。本園においては、「明るさ」は、「思いやりと感謝の心」の表出である。他者に対して歪むことなき衷情を表出できることこそが「明るさ」なのであり、その「明るさ」は、当然、明澄な内面の実直な表れであるから「素直」であることと連関する。そのような「明るさ」「素直さ」を持ちうるがゆえに、子ども同士の純粹かつ誠実な関係性が生じうると考えられるのであり、これが「仲良」さに他ならない。同様に、他者に対する衷情の真摯な表出である「正しさ」は、衷情を屈折させることのない「正しい言葉」によって伝達される。ここで言う「正しさ」は、文法的な正確さや、TPOを踏まえた適切な言葉遣いであるという以上に、純粹な内面をゆがめることなく他者に開示することを指す。子どもが自分の言葉で思ったことを、持って回ったような婉曲的な言い回しでなく、子どもなりの素直な言葉に託して伝えあうことが目指されている。巧言令色よりも、朴訥・堅実な語り合い、伝え合いを重視しているかに思われる。

最後に掲げられている「創造性に富み、熱心に取り組める」というのは、子どもの精神的なエネルギー、気力が満ち満ちており、取り組むべき課題に

対して真摯・真剣に向き合うさまを表現していると考えられる。

以上に見たように、神道系園の保育・教育理念における子ども観としては、「清く・正しく・明るい・素直な子ども」に代表されるように、神聖で清らかな心をもった子どもといえる。清らかな心を持つ子どもの行動には裏表がなく（正直で）、他者の眼には、生命力が溢れて元気に映る（明るい）。神道における人の清らかさは、生まれ持ったものであるが、生命力が弱まる状態になる（気が枯れる）と穢れてしまう。内面的エネルギー（=気）の充溢こそが清らかさの前提である。穢れ（=気枯れ。内面的エネルギーの枯渇）を避けるため、内面のエネルギーを賦活することが清め（清浄）である。つまり、清めは精神の活性化である。

続いて、上述した清らかな子どもを神道保育においてどのように育てるのかを明らかにするために、神道保育と関連が深いと考えられる保育環境としての「神社」および「鎮守の森」に着目したい。

(3) 神社と祭り

「神社」の共起語は、共起性が高い順に、「保育」(Jaccard 係数：0.3478)、「鎮守」(Jaccard 係数：0.2667)、「開く」(Jaccard 係数：0.2)であった。「鎮守(の森)」と「神社」の共起からは、鎮守の森と神社の一体性が観念されていることが読み取れる。さらに、「保育」と「神社」が共起していることから、神道系園の保育・教育において、「神社」に隣接する「鎮守の森」において「保育」を行うことに特色があるとされていることが予測される。つまり、鎮守の森と一体化した神社が、保育が行われる場、保育環境として位置づけられていることが示唆されているのである。

さらに、神社そのものは、例大祭など地域共同体においては古くから人々が集まる場所であったし、現在においても地域に「開かれた」場所である。この点から、神社の共起語に「開く」が挙げられるのであろう。

以下では、神社という空間が、具体的にどのような保育環境として語られているのか、「神社」に関するそれぞれの用例を検討していく。

(1) 神社の清く明るい安全な環境の中で、心身ともに伸び伸びと健やかな成長を図る。

(水田幼稚園)

水田幼稚園においては、神社は「清く明るい安全な環境」である。ここからは前項において示した、清らかな心を持つという神道系園における子どもを育てる環境のなかに神社が位置づけられていることが読み取れる。つまり、神道系園において神社は園舎や園庭と同じように保育環境の一部なのである。その環境としての神社は、「清く明るい」場であり、その特質は、目指されるべき子どもの内面と同質のものとして位置づけられている。

言うまでもなく、神社が清いのは、神様が祀られ、宿るからであり、その清さは神聖さと同義である。それが「明るい」のは、物理的に太陽光が降り注ぐ明度としての明るさはもちろんのことながら、神の神聖さや清さが満ち満ちた状態を「明るい」とも言っているのである。神社は古来より「清い」心を持った人々が集い、祭りを行って交流する場所とされてきた。つまり、神社に満たされる明るさを分有する氏子、すなわち神社を中核とした地域共同体の構成員である住民が、邪念なく交流し合う「明るさ」がある。「清い」心を持った人々が集い、語らい、祭りを行うさまは「明るい」ものと捉えることができる。

神社が「安全」だというのは、人々が集う場所であるからこそ、外部からの〈異人〉の介入を許さないというセキュリティ面での心配がないというばかりではない。むしろ、ここでの「安全」は、「清い」心を持った人々が集う場である神社に在ることによって心が安らぐ、穏やかな心持ちになる、ということであろう。「安全」とは、外界の危険性、汚穢から隔絶されたシェルター、あるいはサンクチュアリ（聖域）としての神社の清浄性の表現でもあろう。逆に言えば、神社の外部、すなわち外部の社会は「安全」ではなく、不安定であり不全の状態に置かれていると観念されているのである。

一方で、神社の「祭り」と神道系園の保育内容の関連を窺わせる保育・教育理念も見られる。

神社の伝統行事に参列し、神への敬意と感謝や思いやりの心を育む。

豊かな自然に恵まれた神社の杜を日常生活の中に取り入れ、子どもたちが明るく、いきいきと力いっぱい遊びや仕事に取り組むことを大切にしながら次のような子どもを育てることを目標に保育をすすめています。

(諏訪幼稚園)

上記の諏訪幼稚園の用例からは、神社の「伝統行事」である例大祭等に子どもが参画することと、「神への敬意と感謝や思いやりの心」を育むことが重ね合わされている。神道は元来、自然の恵みに感謝して、自分が住む土地にあつまる靈魂（神様）をもてなして祀るものであった。古くは、大きな木の周辺や巨石、あるいは集落の近くの丘や山に神々が集まると考えられており、こうした場所は「祭り」のとき以外には入れない聖域である。こうした祭場が今日の神社の原型だとされる。今日においても、神社の境内にある大きな御神木は、人智を超えた自然の神秘、その自然に宿るとされる神様の存在を感じさせる。例大祭などの「伝統行事」においては、御神輿を担いだり、豊年太鼓を奉納したりするが、神道においてこれらは自然に宿る神様を喜ばせ、感謝する意味があると観念される。つまり、例大祭などの神社の「伝統行事」そのものが、「神への敬意と感謝」を表現する営みなのである。なぜ人々が神様を敬い、感謝するかといえば、神道における神様は、自然に宿り、自然の恵みを与える（例えば、雨を降らせ、米を実らせ、地域共同体に生きる人々を見守る）からである。これが「思いやりの心」につながるのは、同じように地域共同体の一員として、神様を敬い、感謝してきた人々の存在に思い至るようになるからであろう。ここでの「思いやり」というのは、自分と同じように神様を敬い、感謝しながら、共に生きる人々のことを気遣う心持ちである。

神様に感謝する場として祭りが挙げられる例には、以下がある。

神社保育 ～鎮守の杜（もり）を保育の庭に～
[…中略…]

③ 感謝を大切にすること

子どもが主役の「まつり」や四季折々の「まつり」を通して子どもの成長を神様

に感謝し、健康を願う親の気持ちを、年間の行事の中に楽しく取り入れることで、神様や親に感謝をすることの大切さを育てる

(みくに幼稚園・みくにキッズ保育園)

みくに幼稚園・みくにキッズ保育園の場合、子どもが主役の「まつり」は、「子どもの成長を神様に感謝し、健康を願う親の気持ち」を行事として表現したものだとしている。そもそも祭りは、神道において人々が神様に感謝の気持ちを表現するために行うものである。祭りは、いわば地域共同体（鎮守を中核とした氏子共同体）が、神様への感謝を共同的に演じることで、共同体の紐帯を強化し再確認する営みである。子どもがそこへと参加することは、神様への感謝を子どもが自覚することを促すことが目指されると同様に、神への感謝を地域共同体の新規のメンバーとして、いわば演劇的に共有することが目指されてもいるといえよう。

「四季折々の「まつり」」は、当然のことながら毎年繰り返される。いわば同じ祭りに子どもは反復して何度も参加することになる。去年と違って今年は、というように、子どもの祭りへの参加の仕方も変容していくであろうし、そのような子どもの周縁的参加から十全的参加へという社会的参加の変化（それは子どもの発達であり、成長に他ならない）を、保護者や子どもに関わる地域の大人が確認・再確認する機会ともなるだろう。

金立幼稚園では、祭りを年間行事として取り入れている。

金立神社秋季大祭

秋季大祭では年長のお友達が徐福太鼓を奉納します。

(金立幼稚園)

例大祭などで太鼓を奉納する風習は古くから存在していた。元来、西日本においては太鼓踊りと呼ばれる神事が盛んである。太鼓踊りは、太鼓の音が雷鳴を連想させることから雨乞いとして長らくなされてきた（國學院大學 日本文化研究所 編 1999：288, 「太鼓踊」の項目）。太鼓の響きは、自然の波長とシ

ンクロするものと考えられる。つまり、祭りにおける太鼓の演奏は、演奏者である子ども自身の心身の揺さぶりと、自然に宿る神様の波長とがシンクロするさまを表現しているのであろう。この揺り動かしは、演奏者自身の沈滞した気を活性化することにもつながる。太鼓の演奏は、穢れ（＝気が枯れる）ことを避けるための魂振、アニメーションなのである。子どもたちが神様への祭りにおいて太鼓を奉納することは、まさしく子どもたちの精神的エネルギーを振起させる「清め」の行為に他ならない。

神道系園における子どもたちにとってハレ、つまり非日常的な場面において神様の存在を感じ取る契機こそが祭りである。しかしながら、子どもたちには、祭り以外にも、日常的にも神様の存在を感じ取ることが求められている。それが日常的儀礼の意義である。例えば、神道系園において「お日供」と呼ばれる儀礼は、園内にある神棚等にお供え物をして、神様を敬う気持ちを育てることが目指されるものである。あるいは、月参拝といって、神社に月ごとに参拝するところもある（神保連 編 2001, 下巻：86）。このような短期的な周期で反復される日常的な敬神儀礼は、子どもにとって、神様が非日常的に顕現する見えにくく遠い存在ではなく、日常生活の中にも浸透し、子どもたちと共に存在している身近な存在であることを自覚化させるための営みであるといえよう。

(4) 鎮守の森(杜)

上掲の諏訪幼稚園においてすでに見たように、神社には「豊かな自然に恵まれた神社の杜」があり、そこは「子どもたちが明るく、いきいきと力いっぱい遊びや仕事に取り組む」場、すなわち子どもにとっての活動の場である。以下では、「鎮守の森」の保育環境としての意味づけを検討する。

神社にある森(杜)は、鎮守の森(杜)と通称される。「杜」は「もり」と読み、鎮守の森と同義である。神保連の新ハンドブックの名にもあるように「鎮守の森」は神道系園の保育の特色を語る上での鍵になるものと考えられる。現代では、氏神や産土神は「鎮守」とほぼ同義的にとらえられており、鎮守神はその土地に住む住人を守護する神として祀られるようになっている。今日の「鎮守の森」の鎮守

とはこの意味だとされている（國學院大學 日本文化研究所編 1999：91、「鎮守神」の項目）。つまり、神道系園の母体となる神社の多くが、この「鎮守の森」と関わりを持っており、それは地域共同体の中核に位置づくものだという事である。

「森」を調べると、共起性が高い順に「鎮守」（Jaccard 係数：0.4）、「お参り」（Jaccard 係数：0.3333）等が挙げられる。ここからは、神社に参拝することと、「鎮守の森」を訪れることに関連があることが読み取れる。「森」の用例には次のようなものがある。

豊かな心をはぐくむ

天神さまの森で、いろいろな物事に触れ、知識を豊かにし、感動する心をはぐくみます。

（太宰府天満宮幼稚園）

太宰府天満宮幼稚園の場合には、「天神さまの森」で「知識を豊かにし、感動する心」を育むことを目指している。「天神さまの森」に入ると、どんな知識が豊かになると考えられるかといえば、自然科学的なものだと思う。例えば、この色づいている木の実は何か、この虫は何という名前か、どうして葉っぱは秋になると落ちるのか等、子どもにとって、森には疑問を投げかける対象が豊富にある。きれいな声で鳴く鳥がいたり、美しい蝶を見かけたり、豊かな自然に子どもは「感動する」。人智を超えた自然の豊かさに驚異を感じる事が、ここでの「感動する心」だと考えられる。自然に対する「感動」は、自然に対する知識の結果、生じるものであるとされる。それは逆に言えば、自然に対する知識は、自然への「感動」のきっかけを提供するものに過ぎず、自然への「感動」が、自然への感謝や畏敬という「豊かな心」へと昇華していくことが期待されていることから、むしろ「森」における自然は、子どもの情緒を開発するための触媒であり、そこには情緒主義的な色彩を見て取ることができる。

大幡保育園では、鎮守の森における自然に触れることが、「愛」や「思いやり」を育てるという情操教育上の意味を持つと考えられている。

鎮守の森で遊ぶ中で自然にふれ四季の移り変わ

りを感じたり、又国旗掲揚、お参り、栽培、飼育を通して、自分が住んでいるところを愛する心、自然の恵みに感謝する心、思いやる心などを育てる神社保育をしています。

（大幡保育園）

この場合、「自然にふれ四季の移り変わりを感じることができる場所が「鎮守の森」である。「四季」は、自然の中にある草花や木々の変化を通じて感じ取られるものであろう。つまり、鎮守の森も四季の中で変化するのである。その変化を感じ、心を揺さぶられることが子どもに期待されている。

四季を感じさせる「鎮守の森」で遊ぶことで、子どもが、自分が住んでいるところを愛する心（郷土愛）、自然の恵みに感謝する心、思いやる心を育てられると考えられている。なぜ「鎮守の森」で遊ぶと、郷土愛や恵みに感謝する心、思いやる心が育つのであろうか。これは、「鎮守の森」が神社に隣接するものであることと関係する。大いなる自然の恵みに感謝し、その自然に宿る神様を敬うために、そもそも人々が集う場が神社であった。「鎮守の森」は、地域共同体における巨木や巨石などの人智を超えた自然の驚異を中心に、神聖な領域として人々が開墾・開発することなく、残してきたものである。神社及び鎮守の森は、地域共同体の中心的な位置を占めており、そこで行われる祭りは地域の人びとが協力することで成り立つものである。「鎮守の森」は、その地域に住まう人々にとっての「郷土」の原風景と考えられ、それゆえに「鎮守の森」は、「郷土愛」、つまり、鎮守の森に代表される郷土を大切にすることを喚起する。

さらに、「鎮守の森」の巨石や巨木などの大いなる自然は、人々に自然への畏敬の念を抱かせるものでもある。自然の移り変わりは四季として感じ取られるものであるし、人々の生活も四季に即して営まれる。例えば、春に田植えをし、秋に米を収穫する。米が収穫できるのは、人が努力した成果もあるが、そもそも気候に恵まれなければ米は育ちようがない。つまり、人々の生活が成り立つのも、結局は自然に宿る神様のお恵みによるものということになる。だからこそ、四季の変化として自然の豊かさを実感させる「鎮守の森」で遊ぶことが、自然の恵み

に「感謝する心」「思いやる心」を育むこととつながられるのである。

鎮守の森とは、神様が自然という形で顕現する場であると同時に、その神を共同的に祭ってきた子どもたちの先祖としての地域住民の信仰心、あるいは生活上のメンタリティが残存・継承される場でもあるのである。

以上に見たように、「鎮守の森」は、清く明るい神社に隣接した、自然の豊かさを感じ取らせ、神様への感謝の心、神様を敬う心を育む場所であると同時に、地域共同体の構成員としての過去の先祖を含む人間たちが、神様への信仰を通して自らの結束と連帯を再構築し続けてきた場だと言える。後者の機能は、具体的には「祭り」、すなわち祝祭として表現される。子どもが「祭り」に参加することには、時空を超えた共同体への自らの帰属意識をかき立てる目的があるのである。

次に、感謝の対象である「神様」が神道系園においてどのように位置づけられているのかを見る。

(5) 神様

次に示す「神様」の用例からすると、神様は感謝され、敬われる対象であると言える。

神社保育

保育園は神社の下にあり、温泉神社の神様に見守られながら生活をしています。

神様を敬い、祖先を尊び、明るく清く正しく素直に。(敬神崇祖・明浄正直)です。

(若木保育園)

若木保育園の場合、「神様」は人々を「見守る」存在である。その「神様」を敬うこと、祖先を尊ぶことが重視されている。神様を敬うことも、祖先を尊ぶことも、子どもたちが自分の感覚を通しては知覚できない何ものかを想像力によって捉え、さらにはその超越性に畏怖することだと言える。そして「祖先」は、すでに述べたように、同じ「神様」を敬ってきたという共通点を、現在に生きる子どもと分かち持っているのである。自然に宿る神道の神様のおかげで、日々の生活が成り立っていることに感謝することであり、自分のいのちが祖先からのいのちの

バトンを受け継いだものだけということに思いを馳せること、自分が住まう土地を拓き、豊かにしてきた先祖の事績を称えることであろう。それは、日常的なふるまいとしては、神様が授けた「明るく清い」心を、他人に「正しく素直に」向けることに他ならない。

つまり、子どもの成長や人々の生活を見守る存在として「神様」が位置づけられているのである。子どもの成長や生活を見守る「神様」に対して人々は感謝する。神道系園においては、この「神様」への尊敬の念を抱かせることを目指しているのだ。

鈴木・吉田・安部(2018)が明らかにしているように、プロテスタント系の保育所・幼稚園等における「神」は、生命を与えてくれる存在であると同時に、私たちが生きる自然や世界の恵みを与えてくれる存在、愛し、与える存在であった。目に見えない「神」を身近な存在として感受するのは「愛」を媒介としてなされる。子どもは「愛」に気づくことによって「神」やイエスの存在を感じ取る。「神」からの愛を模倣することで、人々は「隣人愛」と呼ばれるような愛を実践する。

プロテスタントの「神」と比した場合、神道の「神様」は、鎮守の森に象徴される自然を通じて感じ取られるものであり、人々を見守る存在である。命を与えてくれる垂直的な存在というよりも、命として、自然として、子どもたちや地域と共存している水平的存在と言うことも出来よう。自然の中で生かされ、自分の祖先も含めてその土地において子孫が繁栄していることに対して、子どもたちは、「今ここ」にいる「神様」に感謝することにより、神様との連帯と、その神様を敬い祀ってきた(想像の)地域共同体への帰属を実感するのである。

3 まとめ

神道系園の保育・教育理念の特色としては、他の宗教と比した場合に、神様や神社などの神道の用語を前面に示している点、加えて、清く神聖な子ども観を中心に据えている点が挙げられる。

神道系園において、子どもは、元来、神聖で清さ(清さ)を有していると捉えられている。ここでいう清さ(清さ)は、清流の水のように、よどみがなくて、透き通ったさま、明澄なさまを表す。清い子ど

もに神道系園が求めていることは、「正しく・明るく」生きることである。ここでの正しさは、言動・行動の実直さとして現れるものであり、子どもが子どもなりの言葉や行動であっても、裏表なく自らの言葉で表現し、行動することを意味する。明るさは、上述した淨い子どもの精神的なエネルギーが溢れているさま（例えば、元気な様子、笑顔等）を指し、淨い子ども同士が裏表のない言葉で、実直に相互を開示し合いながら、交流する様子を表現したものである。

上記のような子どもの対極にあるのが、穢れ（＝気が枯れること）である。神道においては穢れをさけるために清めを行うが、神道系園においてこうした清めは、日常的には「月参拝」や「お日供」として神様に感謝の心を示すことである。非日常的な清めの一つと考えられるのは、「祭り」である。

神道における「祭り」とは、地域共同体の中核に位置づく、鎮守神に対しての感謝を捧げる行事である。神道系園に通う子どもたちもその地域の一員であると考えられているから、神道系園においては、「祭り」を年間行事の一つに位置づけている場合が多い。「祭り」において、御神輿を担いだり、太鼓を奉納したりするのは、神様を喜ばせることにつながるとともに、御神輿の担ぎ手や太鼓の演奏者自身の、魂振^{たまふり}、精神的エネルギーの活性化につながるからだと捉えられる。子どもは、祭りに参加することで、自らの精神的エネルギーを活性化させるとともに、自分が属する地域共同体のつながりのなかに自分自身があることを感じ取ることであろう。

神道系園においては、神社は祭りのときにだけ関わるものではない。神社と共にある鎮守の森は保育環境として位置づけられるからである。鎮守の森の自然の豊かさに子どもは心を揺さぶられる。鎮守の森における自然の転変は「四季」として子どもに感じ取られ、子どもが住まう土地の風土の原風景として記憶されることであろう。鎮守の森は、その地域の中核に位置づく自然であるから、その自然を大切なものとして思う心は、郷土愛として子どもの中に育っていく。さらに、自然に対する驚異は、自然に宿る神様の存在を感じ取らせ、子どもの成長を見守る神様を敬う心を育てる。つまり、鎮守の森は、神道系園における情操教育上重要な保育環境なのである。

神道における神様は自然に宿るものと捉えられ、その自然的存在としての「神様」は、人々が健やかに成長すること、すなわち内面的エネルギーを失うことなく、充実した内面・精神を備えた存在として生育する過程を見守ってくれる水平的・共存的存在である。そのため、神道系園においては、子どもが自らの成長を日々見守ってくれている「神様」に対して感謝することが儀礼化され、保育内容として導入されているのである。

註

- 1) 2001年に出された『鎮守の森を保育の庭に：命を育む知恵がここに』は上・下の二巻本である。上巻は、第1章「神道は子どもをどう見るか」、第2章「神道の行事と信仰」、第3章「子どもの遊び・歌・話」の三章構成で、各章が3編から5編の論文から成っている。下巻は、第1章「神社保育の役割」、第2章「年中行事」、第3章「特色ある園行事」、第4章「鎮守の森を保育の庭に」、第5章「神社保育以外の現場から」、第6章「日々の保育に役立つあれこれ」の六章構成で、年中行事等を実例に即して紹介している、第2・3章以外は、論集と呼ぶべき内容である。
- 2) 仏教やプロテスタントの場合には、宗教性が前面に打ち出されてはいない（安部・吉田・鈴木 2018, 鈴木・吉田・安部 2018）。むしろ、日常的な言葉遣いで表現された、「生命を大切にする」などの表現に宗教的な生命観が込められている。
- 3) 次のような用例がある。
「まつり」を通して子どもの成長を神様に感謝し、健康を願う親の気持ちを、年間の行事の中に楽しく取り入れることで、神様や親に感謝をすることの大切さを育てる。（みくに幼稚園・みくにキッズ保育園）

文献

- 安部高太郎・吉田直哉・鈴木康弘（2018）「仏教系保育所・幼稚園における保育・教育理念の特色：東京都内の日本仏教保育協会加盟園のウェブサイト分析から」『敬心・研究ジャーナル』第2巻第2号、11-21頁。
- 厚生労働省（2018）第3-17表「第3編 社会福祉 第2章 児童福祉・母子福祉」『厚生統計要覧（平成29年度）』以下の URL より取得（2019年3月8日）。
- https://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyk_3_2.html
- 國學院大學 日本文化研究所 編（1999）『神道事典』弘文堂。
- 佐藤達全（2006）「仏教保育と保育者の信仰について：キリスト教保育・神道保育と比較して」『日本仏教教育学研究』第14号、134-138頁。
- 鈴木康弘・吉田直哉・安部高太郎（2018）「プロテスタント系保育所・幼稚園等における保育・教育理念の特色：神奈川県を事例として」『敬心・研究ジャーナル』第2巻第2号、23-33頁。
- 全国神社保育団体連合会 設立五十周年事業委員会 編

神道系保育所・幼稚園等における保育・教育理念の特色

(2001)『鎮守の森を保育の庭に：命を育む知恵がここに』（上巻・下巻）学研教育出版。（※引用時には「神保連編」と略記）
内閣府（2018）「認定こども園に関する状況について（平成30年4月1日現在）」
以下の URL より取得（2019年3月8日）。
https://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/kodomoen_jokyo.pdf
文部科学省（2018）「2. 幼稚園」『文部科学統計要覧（平成

30年版）』
以下の URL より取得（2019年3月8日）。
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1403130.htm
矢口裕康（1998）「神道と保育」『宮崎女子短期大学紀要』第24号、187-195頁。

受付日：2019年3月10日

受理日：2019年4月11日

